

Otsuki-Bankei (大槻磬溪) 's Chinese Poetry (漢詩)

SHIMAMORI Tetsuo

要 旨

本稿では幕末から明治の初めを生きた仙台藩の儒者、大槻磬溪(1801～1878)の漢詩を、(1)天地の一蠹魚、(2)開国論、(3)獄中の詩、(4)狼の詩、(5)旅の詩、(6)花の詩、(7)晩年の詩、(8)三男文彦への激励、の8つの観点に沿って読み解き、その生涯と思想の一斑を辿ることを目指す。

Key words : 大槻磬溪

磬溪詩鈔

漢詩

開国論

戊辰戦争

大槻文彦

(令和元年9月27日受理)

大槻磐溪の漢詩

はじめに

本稿では幕末から明治の初めを生きた仙台藩の儒者、大槻磐溪（一八〇一～一八七八）の漢詩を読みながら、その生涯と思想の一斑を辿ることを目指す。

大槻磐溪、その生涯の大概を述べれば、名は清崇、字は子広、磐溪と号した。父大槻玄沢（一七五七～一八二八）号磐水は仙台藩医で、前野良沢・杉田玄白の後を受けて江戸蘭学の基礎を築いた人物として有名である。磐溪はその次男として江戸に生まれ、十六歳のとき林述斎入門、翌年昌平黌に入学。十八歳にして初めて父の故郷一関に帰省し、磐井川五串溪（＝巖美溪）の絶景を愛でた。（後の磐溪の号はこの磐井川に由来する。）二十二歳にして仙台下り、養賢堂諸生扱、養賢堂指南役見習を命ぜられる。のち江戸に戻り、二十八歳、長崎遊学。西洋砲術家高島秋帆と知り合う。三十二歳、仙台藩の儒官となり、江戸住みの侍講に任ぜられた。四十一歳、高島秋帆の西式銃隊の操練を見学し、関心を深める。嘉永二年（一八四九）四十九歳、老中阿部正弘に開国論「猷芹微衷」を建白。嘉永六年（一八五三）五十三歳、黒船来航の年、「米利幹議」「露西亜議」を幕府に建白した。安政二年（一八五五）五十五歳で砲術家江川太郎左衛門に入門。翌年皆伝を受ける。文久二年（一八六二）六十二歳、仙台帰住を命ぜられ、藩校養賢堂添役（副学頭）。慶応元年（一八六五）六十五歳で学頭となった。しかし養賢堂改革の目論見が旧習の部下の反発にあつて阻止され、磐溪は「ヒポコンデル」（神経衰弱）となる。慶応二年（一八六六）六十六歳、病気の故を以て隠居。慶応四年、明治元年（一八六八）六十八歳、仙台藩が盟主となって奥州の諸藩と奥羽列藩

* 島 森 哲 男

同盟を結び、薩長の官軍に対抗したとき、朝廷への建白書、奥羽列藩同盟盟約書、輪王寺官令旨の執筆に関与したとの各で断罪され、明治二年（一八六九）六十九歳で獄に下る。翌明治三年、息子大槻文彦の助命嘆願の効もあつて出獄。明治四年（一八七一）七十一歳、東京へ戻る。明治十一年（一八七八）死去。七十八歳。その著『寧静閣集』は一集から四集まであり、各集が文鈔と詩鈔に別れ、磐溪の詩文を収める。

一 天地の一蠹魚

磐溪は読書をこよなく愛し、「三百六十日／日として書を読まざるは無し」という読書生活に明け暮れた。自ら「俯仰文字に老ゆ／天地の一蠹魚」と称し、晩年、奥羽列藩同盟が破れて獄に下り、刑死を覚悟したときも、「臣は是れ乾坤の一蠹魚／六十九齡寧ぞ死を惜しまん／心に関わるは唯だ嚼み餘せる書の有るのみ」と、もう本を読めないことを嘆いている。「蠹魚」とは書物の紙の間に挟まって紙を舂めるように食らう扁平の昆虫シミ（紙魚）のことで、転じて本ばかり読んでいる人のことを指す。「天地の」「乾坤の」と大きく構えて、微小な「一蠹魚」を出してくるところに磐溪のユーモアと読書人としてのプライドがうかがえる。

読書にまつわるいくつかの詩を見てみると、まず安政三年（一八五六）磐溪五十六歳のときの詩「読書」がある。陸前の後藤九臯が「便ち是れ磐翁先生の小伝なり。」と言うとおり、自らの読書人生を

* 国語教育講座

ふり返り、その著書詩文に言及して、「俯仰文字に老ゆ／天地の一蠹魚」と結ぶあたり、自信のほどがうかがえる。その著書『孟子約解』二巻『近古史談』四巻を挙げ、「頗る程朱（程明道・程伊川と朱熹を補うに足る）」「志は懦夫を起たしむる（軟弱者を奮起させる）に在り」というのはまさに磐溪の自信と気概を示す言葉である。

読書

三百六十日

無日不讀書

釣玄又提要

所得儘有餘

語孟多新解

頗足補程朱

小史叙近古

志在起懦夫

文章不量力

所願学韓蘇

詩多自放語

聊亦供游娛

持此區區業

免為游惰徒

俯仰老文字

天地一蠹魚

△『寧靜閣二集』磐溪詩鈔卷二所収。安政三年（一八五〇）磐溪五十六歳の作。

○釣玄又提要「釣玄」は奥深い意味を引き出す。「提要」は要点を挙げ示す。○所得儘有餘「儘」は極めて。得る所は極めて多い。○語孟多新解／頗足補程朱「語孟」は論語・孟子。「頗」はいささか。「程朱」は程明道・程伊川と朱熹。朱熹の『論語集注』『孟子集注』にその説が見える。

読書

三百六十日

日として書を読まざるは無し

玄を釣し又た要を提し

得る所儘餘り有り

語孟は新解多く

頗る程朱を補うに足る

小史は近古を叙し

志は懦夫を起たしむるに在り

文章は力を量らず

願う所は韓蘇に学ばんと

詩は自放の語多く

聊か亦た游娛に供す

此の區區の業を持ちて

游惰の徒為るを免る

俯仰文字に老ゆ

天地の一蠹魚

朱子学の教科書として当時日本で最も通行した。これに対して磐溪は『孟子約解』嘉永四年（一八五二）刊を著し自説を述べた。序に云う、「其の説の集注に於いて異同有るが若きは、則ち又た強いて求めて苟くも為す所有るに非ざるなり。章を逐い句を逐い、依傍推尋して、勢い然らざるを得ざるのみ。子姑く其の異同を問わず、惟だ余の苦心して是を求むる（において）は、則ち文義句脈の間に於いて、或いは発明する所有らん。豈に敢て義理精微を尽すと曰んや。」○小史叙近古／志在起懦夫 磐溪に『近古史談』四巻、安政元年（一八五四）刊がある。叙に云う、「天正慶長の間の稗史野乘に取り、其の英主名将猛士悍卒驍勇節烈の事に逢えば、感激扼腕の情に堪えず。：身は至盛極治の日に在りて、尚お戦国兵馬槍攘の世を論ずるは、亦た已むを得ずんば非ず。斯の編を読む者、或いは余が微意の在る所を察すれば、則ち游惰を鞭策するの一助たるに庶からんかと云う。」○文章不量力／所願学韓蘇 韓蘇は韓愈・蘇軾。文章は身の程もわきまえず、韓愈・蘇軾に学びたいと願っている。○自放 自らほしいままにする。○區區業 取るに足りない、小さな業績。○老文字 書を読み詩や文章を作って年老いてゆく。○天地一蠹魚「蠹魚」はしみ。書物を食う虫。蠹書蟲ともいう。本ばかり読んでいる人を指す。韓愈の「雜詩」に「古史を左右に散じ／詩書を後前に置く／豈に蠹書蟲の／文字の間に生死するに殊ならんや」。自分は天地の間の一匹の蠹魚である。杜甫「旅夜書懷」に「飄飄何の似たる所ぞ／天地の一沙鷗」。

また文久元年（一八六一）磐溪六十一歳のときの「又た自述」の詩では「勉めよや斃れて後止まん／未だ朝に道を聞くを許さず」と、死ぬまで読書を続ける覚悟を語っている。中間、「山妻 過飲を戒む／卿の言 亦た大いに好し」と、酒の呑み過ぎを諫める妻の言に対して、「お前の言うことは大変結構」と答える（＝実はそう答えて飲み続ける）ところは、竹林の七賢、大酒飲みの劉伶の故事を踏まえて、まことにユーモラス。続く「豚犬 稍く長大／行くゆく孫兒を抱くを見ん」は、子供たちの成長を喜び、やがては孫を抱く息子らの姿を眺める日も来ようと、楽しみにしている父親の慈愛のまなざしが素直に描かれている。そして次の二句では今は亡き父母を偲んでいる。こう

した親しい人々（亡父母、妻、子〔孫〕）に囲まれて、今の自分はある。さればもうしばらく、死ぬまでの間はせいぜい読書生活をしよう。

又自述

性僻耽読書

矻矻不知老

文章雖太拙

潤筆免枯燥

沉有祿代耕

新穀嘗細搗

山妻戒過飲

卿言亦大好

豚犬稍長大

行見孫兒抱

有時感風樹

掃墓薦蘋藻

勉焉斃後止

未許朝聞道

又た自述

性僻にして読書に耽り

矻矻として老いを知らず

文章は太だ拙なりと雖も

潤筆 枯燥を免る

沉んや祿の耕すに代うる有り

新穀 細搗を嘗む

山妻 過飲を戒む

卿の言亦た大いに好し

豚犬 稍く長大

行くゆく孫兒を抱くを見ん

時有りてか風樹を感ず

掃墓して蘋藻を薦めん

勉めよや斃れて後止まん

未だ朝に道を聞くを許さず

△『寧静閣三集』卷三、「昨夢詩曆」卷下所収。文久元年（一八六一）磐溪六十一歳の作。

○性僻 生まれつきの性格がかたよっている。ひねくれている。○矻矻 不知老 「矻矻」はよくはたらくさま。「不知老」は論語・述而篇に「憤りを発して食を忘れ、楽しみて以て憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみ。」○潤筆免枯燥 「潤筆」は詩を揮毫し碑文等を書いて潤筆料を得る。「免枯燥」は干からびることなく生きていける。○有祿代耕 俸祿が有って自ら耕さなくとも暮らしていける。孟子・萬章下に「（下士）祿は以て其の耕に代うるに足るなり。」○新穀嘗細搗 「新穀」は今年穫れた穀物。論語・陽貨篇に「旧穀既に没きて新穀既に升る。」「嘗細搗」は細かに搗いたものを食べる。○山妻戒過飲／卿言亦大好 竹林の七

賢の一人、大酒飲みの劉伶は妻に「君飲むこと太だ過ぐ。撰生の道に非ず。必ず宜しく之を断つべし。」と戒められたが、劉伶は「甚だ善し。我自ら禁ずる能わず。唯だ当に鬼神に祝りて自ら誓い之を断たんのみ。便ち酒肉を具う可し。」と言って妻に酒と肉を用意させた。そして「婦人の言は慎んで聴く可からず。」と、酒を飲み肉を食らい隗然として酔ったという（晋書・列伝卷一九、世説新語・任誕篇）。○豚犬稍長大 「豚犬」は不肖の息子たち。豚兒・犬兒。如電と文彦を指す。○感風樹 「風樹」は「風樹の嘆」。「樹静かならんと欲して風止まず、子養わんと欲して親待たず」（韓詩外伝・卷九）。子が親に孝養を尽そうと思っても、親はすでに死んでしまつて、孝養を尽せない悲しみ。○掃墓薦蘋藻 「掃墓」は墓参り。芝高輪東禅寺に父大槻玄沢の墓がある。「蘋藻」は水草、浮草。古人は先祖への捧げものとして祭壇に祀つた。「蘋藻を薦む」とは祭祀を行うこと。○勉焉斃後止 「斃後止」は論語・泰伯篇に「士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。…死して後已む、亦た遠からずや。」○未許朝聞道 論語・里仁篇に「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。」ここはまだ死ぬのは早いから「朝に道を聞く」には及ばないということ。

自述

閑閉緜書倦則眠

自称松下迂仙

紛紛世上風塵事

不到林中読易辺

自述

閑なれば則ち書を緜き倦れば則ち眠る

自ら称す松下の迂仙と

紛紛たる世上風塵の事

到らず林中易を読む辺りに

△『寧静閣四集』卷二、磐溪詩鈔四編所収。文久二年（一八六一）磐溪六十二歳の作。

○迂仙 世事にうとい仙人。○世上風塵事 世間のわずらわしく、けが

らわしい俗事。○読易『易』の書を読む。『易』は経書の中でも最も哲學的な書で、竹林の七賢たちも老・莊とともに愛読した。

二 開国論

磐溪は幼い頃より蘭学研究に勤しむ父大槻玄沢の姿に接してきたし、また長崎に遊学したり、西洋砲術に接したりした経験もあることから、世界を広い目で見る事ができた。したがって攘夷論が叫ばれるなか、積極的に開国を説いた。ペリーが浦賀に来たときは二度ともわざわざ江戸から浦賀まで出て向いて黒船をこの目で見、スケッチを残しており(磐溪「塵積成山」二集第一冊、一関市博物館所蔵)、強い関心を示している。

磐溪の次男大槻如電は「磐溪事略」において次のように述べている。「嘉永以後徳川幕府の末世に、外国との関係が起り、海内の人々は高きも卑きも、武士も学者も、どいつもこいつも攘夷々々ばかり叫び立て、西洋人を夷狄だの禽獸だのと罵り、追払い打払う事ばかり喧ましく唱へる其中に立つて、祖父様(＝磐溪)は当時の輿論に反対して開国論を主張なされた。深く自ら信ずる所あり、見る所があられてのことである。夫れは欧米諸国と交通せねば時勢が許さぬ。今からは支那ばかりの文物では足り無い。攘夷を唱へる族は、海外の事情を知らない盲目同様の奴原である。兵力軍器の優劣を知らないで、戦争ができるものか。弓矢、槍、刀で大小の鉄砲に向へるものか。戦の勝敗は始めから分明である。／＼されば攘夷を唱へる族は、国家を誤る大タワケである、とかう云ふのが御持論であった。」

また磐溪の三男大槻文彦は父の開国論「猷芹微衷」について次のように述べている。「其論旨今の世にて観れば言ふまでもなき事なれど、当時全国の志士の攘夷論の如き中に、独り海外の事情に於て言ふ所を異にせり。観む人其身を当時に置きて読まば、衆に抽きたるを覚ゆ。」(宮城県図書館所蔵記録文書、大正十二年八月の記述)。

ここではまず開国論を直接説いたものではないが、その姿勢のうかがえる詩から読んでみることにしよう。おそらくは自筆の画に題した詩「磐溪帰釣図 木仲蘭の為に題す二首 其の一」で、天保十四年(一八四三)磐溪四十三

歳の作である。

雨後の靄に煙る柳や風に散る花びらの中、奇巖の間をすり抜け、急流を下る舟を描いて、まさに陶淵明の桃花源記の逆バージョン(川下から源流へではなく、上流から下流へ)になっている。ここでは行き着く先が陶淵明のように外界から隔絶した桃源郷ではなく、豊かな漁獲が得られる川下の早瀬になっている。「漁人復た隈を争うの意無く／報じて道う前灘に魚最も多し」と、漁師は隈を争う狭い器量は持たず、前方の早瀬に魚がもつとたくさんいるぞと教えてくれた。閉鎖的な桃源郷ではなく、「旧溪の阿」を去って奇巖重なる峽谷をくぐり抜けた先に、獲るものが多い広い川下があると指摘するところに、磐溪の「外へ向かう」志向が描かれているとみることができよう。

磐溪帰釣図為木仲蘭題二首 其一

磐溪帰釣図 木仲蘭の為に題す二首 其の一

雨後春山掃翠蛾	雨後 春山 翠蛾を掃い
釣舟戦在舊溪阿	釣舟戦いで 旧溪の阿に在り
忽穿曲岸崩邊去	忽ち曲岸崩るる辺りを穿ちて去り
且避奇巖乱處過	且く奇巖乱るる処を避けて過ぐ
煙柳垂絲遮短笠	煙柳糸を垂れて短笠を遮り
風花吹雪點輕簑	風花雪を吹いて輕簑に点す
漁人無復争隈意	漁人復た隈を争うの意無く
報道前灘魚最多	報じて道う前灘に魚最も多しと

△『寧静閣一集』磐溪詩鈔卷三所収。天保十四年(一八四三)磐溪四十三歳の作。

○磐溪帰釣図 「磐溪」は大槻磐溪の父大槻玄沢(号は磐水)の郷里、一関の磐井川の中国風な呼び方。特に景勝地五串溪(いつくしけい)、今の巖美溪が有名。大槻磐溪は十八歳の時、初めてここに遊んで以来、自ら「磐溪」と号するようになった。磐溪は画も能くし、ここにいう「磐溪帰釣図」は五串溪に釣舟を描いた自筆の画であろう。そこにこの詩を題して贈ったものかとみられる。(ちなみに『寧静閣四集』には磐溪自筆の「五串溪真

景」図が写真版で収められている（『詩集日本漢詩』第十七卷〔平成元年、汲古書院〕）。「磐溪婦釣図」も同類の画であったに違いない。○木仲蘭 父大槻玄沢の高弟、佐々木中沢、字は仲蘭（一七九〇～一八四六）のこと。陸中西磐井郡上黒沢村出身。磐溪とは「意気投合、交吐肝肺（肝胆相照らす）、莫逆八年一日の如き」間柄だった（「金蘭遺臭」）。○掃翠蛾 「翠」はみどり。「蛾」は蛾眉。ここでは蛾の触覚のようなゆるやかな曲線を描いた山並み。「翠黛」に同じ。「掃う」とは雨が上がって山の姿がすつきりと見えるさま。眉を掃く（刷く）の縁語。○賦 賦は賦の俗字。賦は杖に同じ。船を繋ぎ止めるく。ここでは動詞に読んで「つなぐ」、繋留するの意。○舊溪阿「舊溪」はふるい、昔からあるたにがわ。「阿」はくま。川の湾曲した部分。○遮短笠「短笠」は小さい笠。それに水面に垂れた柳の枝がじゃまするように当たる。○風花吹雪「風花」は風に舞い散る花びら。「雪を吹く」は雪が風に舞うように白い花びらが舞い散る。○點輕簑「輕簑」は軽いみの。そこに花びらが舞い落ちて点々と付くさま。○爭隈意「隈を争う」とは漁場を争奪すること。よく獲れる漁場を秘密にして独り占めするなど。○報道 報じて道う。知らせる。○前灘 前方の早瀬。

続いて嘉永六年（一八五三）磐溪五十三歳のときの「隣交行」と題する歌を讀んでみよう。題下の原注に「嘉永六年」とあり、第十一～十二句目に「瓊浦（長崎の異称）の秋」「空艦只だ待つ一封の報」とあることから、同年七月十八日、ロシア船が長崎に来航したことを歌っている詩であることが分かる。（ペリールが浦賀を去って一カ月後。）

磐溪は建白書「猷序微衷」において、イギリスを排し、ロシアと和親を結ぶべきことを説いて、次のように言っている。「英吉利は姦商猾賈なり。露西亜は王侯貴人なり。故に今にして彼と一に和好を結ばんか。我内地の民また北顧の憂い無くして、力を西南海防に専らにするを得ん。豈策の全き者に非ずや。惟これ寧きのみならず、露西亜は実に宇内第一等の強大国為りて、今は則ち歐羅巴一洲の盟主と為す。彼をして我が与国と為し、我其威重を仮り、以て諸蕃の心を屈服すべくんば、則ち漕路梗塞の患い、必ず神を勞せず

して自消するに足らん。」（「猷序微衷」隣交篇上）。

詩には「縦ひ洞門をして深く自ら鎖さしむるも／其れ外人の来りて津を問うを奈んせん」、日本は洞窟の門を閉ざした桃源郷のようなものだが、外部の人がやってきて「津を問う」＝交渉を求めたらどうする気だと、もはや鎖国攘夷の不可能なことを説き、「今に及んで 情好を結び／手を鄰邦に仮り強暴を防ぐことが急務だと主張している。ロシアをまるで信用しているところが、今日の眼から見るといささか意外だが、攘夷の不可を明言しているところは、文彦の言うように「当時全国の志士の攘夷論の如き中に、…衆に抽きたる」見識だった。

隣交行【原注】嘉永六年 隣交の行【原注】嘉永六年

九分字内有其一

宇内を九分して其の一を有す

肯比米利与英吉

肯て米利（堅）と英吉とに比せんや

不唯万国推帝号

唯に万国帝号を推すのみならず

風俗淳彫人沈実

風俗は淳彫にして人は沈実なり

我是天地一桃源

我は是れ天地の一桃源

花落花開三百春

花落ち花開きて三百春

縦使洞門深自鎖

縦ひ洞門をして深く自ら鎖さしむるも

其奈外人来問津

其れ外人の来りて津を問うを奈んせん

不若及今結情好

若かず今に及んで情好を結び

仮手鄰邦防強暴

手を鄰邦に仮り強暴を防がんには

君不見烟波万頃瓊浦秋

君見ずや烟波万頃瓊浦の秋

空艦只待一封報

空艦只だ待つ一封の報

△『寧静閣四集』卷一、磐溪詩鈔三編所収。嘉永六年（一八五三）磐溪五十三歳の作。

○九分字内有其一 冒頭の四句はロシアのことを言う。「宇内」は天下。海内。その九分の一を占める。驍符の大九州説による表現。○肯比米利与英吉 アメリカやイギリスの比ではない。○不唯万国推帝号 万国がロシア皇帝を推戴するばかりでなく。○風俗淳彫人沈実 「淳彫」は素

直で厚い。真心がある。「沈実」は落ち着いていて実直。○我是天地一

桃源 日本は天地の間の一桃源郷である。外国と絶縁し鎖国する日本のすがたは桃源郷と同じ。○花落花開三百春 徳川幕府の支配は三百年。

○縦使洞門深自鎖 たとえ桃花源の洞門を深く自ら閉しても。○其

奈外人来問津 外国人の来訪をどうして断れようか。○不若及今結

情好 「及今」は今のうちに。「結情好」はロシアと友好関係を結ぶ。○

仮手鄰邦防強暴 隣国(ロシア)の助けを借りて強暴な国(アメリカ・イギリス)の侵略を防ぐ。○烟波万頃瓊浦秋 「烟波万頃」は広々と広がる

波。「瓊浦」は長崎の異称。瓊江ともいう。嘉永六年(一八五三)七月十八

日、ロシアの提督プチャーチンは四隻の軍艦を率いて長崎に来航。開国と

通商、さらに千島・樺太の国境を定めることを求めて来た。○空艦只待

一封報 ロシア船は幕府からの返答をひたすら待っている。

しかしこうした磐溪の開国論は攘夷論が熾烈を極める当時にあつては当然厳しい批判にさらされた。例えば同じ仙台藩の儒者岡千仞(一八三三—一九一四)は磐溪の開国論について、

翁ハ漢学専門ニテ洋書ヲ修メタルニ非ズ。其外事ヲ論ズルハ、見取聞取、

口耳ノ学ニ過ギザリキ。：開国ハ持論ナルモ、欧術ニテ富強ヲ謀ル横井小

楠ヤ、欧兵法ニテ幕軍ヲ瓦解セシ村田蔵六(大村益次郎)ノ如キ人傑ノ脚

下ニ寄付クベキ開国識見才幹アルニ非ズ。：遂ニ其持論ガ一躍シテ同盟論

トナリ、朝敵トナリ、徳国(ドイツ)商船ニ托シテ同盟書ヲ各国使館ニ投ジ、

義名ヲ海外諸国ニ唱フルト為スニ至ル。苟クモ常識ヲ具シタル以上、誰レ

ガ精神錯乱者ノ所為ト為サザラン。(『在臆話記』巻九 開国論)

云々と口を極めて批判し、聞きかじりで識見に乏しい「口耳ノ学」に過ぎぬ

と一喝している。

また磐溪の開国論を皮肉った狂詩も当時出回ったらしい。『寧静閣四集』巻一「隣交行」の付注に引く木村芥舟「高粱一夢」に次のような記述がある。

「時に一狂生有り、先生の詞に和して云う、

世間馬鹿誰第一 世間の馬鹿誰か第一

蘭医小僧溺英吉

蘭医の小僧 英吉に溺れ

曾作愚文名猷芹

曾て愚文を作り猷芹と名づく

大言一向虚無実

大言一向に虚にして実無し

豈知王道有淵源

豈に知らんや王道に淵源有り

皇統綿綿幾千春

皇統綿綿として幾千春なるを

身生 皇国心帰賊

身皇国に生まれて心は賊に帰す

馬兮鹿兮彼何人

馬か鹿か彼何人ぞや

漫称外国風教好

漫りに外国は風教好しと称するも

其奈追年働乱暴

其れ年を追うて乱暴を働くを奈んせん

君不見百万歳祖宗恩

君見ずや百万歳祖宗の恩

彼馬鹿輩何以報

彼の馬鹿の輩何を以てか報ぜん

其の言鄙俚にして、固より一時の戯作に属すと雖も、亦た当時の外交を嫉むの甚だしきを見るに足るなり。」

因みにこの「一狂生」とは旧福岡藩士の月形弘なる人物だったらしい。(同じく付注に記す大槻文彦の言葉。「蒲生重章が近世偉人伝五編に云う、月形弘は旧福岡藩士なり。：同志を会し、尊攘の道を講ず。時に東北陬に一老儒有り、蕃学を好み、和議を主とす。弘其の七古の韻に次して口を極めて罵詈す云々と。：一狂生とは蓋し是れなり。)」

三 獄中の詩

慶応四年(明治元年、一八六八)、薩長を中心とする新政府軍(「官軍」と奥羽列藩同盟(「朝敵」との間で戊辰戦争が始まったとき、磐溪は朝廷への建白書、奥羽列藩同盟盟約書、輪王寺宮令旨の起草に与ったとされる。戦争終結後、その罪で断罪され、明治二年(一八六九)四月九日、六十九歳で獄に下る。翌明治三年(一八七〇)元旦、息子大槻文彦の助命嘆願により出獄するまで、約九か月を牢内で過ごした。この間作られた三十餘首の詩が『寧静閣四集』巻二、「福堂詩識」に残されている。そのうちの三首を読んでみることにしよう。

はじめに「獄に下されて作る有り」と題する詩。戊辰の戦雲の非なることを知った磐溪は、明治元年(一八六八)八月、家族を伴い西磐井郡中里村(現

一関市中里町)の宗家大槻専左衛門の家に退居。九月逮捕されて仙台へ護送。明治二年(一八六九)四月九日に揚屋(未決囚の獄舎)入り。尋問は無し。これはその時の詩である。

おれにどんな罪があるというのだ。おれはただの「乾坤の一蠹魚」に過ぎぬ。もう六十九歳。死んでも惜しくはない、と意気軒昂たる詩である。

下獄有作 獄に下されて作る有り

(注) 時己巳四月九日 (注) 時に己巳四月九日

忽然下獄定何辜

忽然として獄に下さる定めて何の辜ぞ

臣是乾坤一蠹魚

臣は是れ乾坤の一蠹魚

六十九齡寧惜死

六十九齡寧ぞ死を惜しまん

関心唯有嚼餘書

心に関わるは唯だ嚼み餘せる書の有ることのみ

△『寧静閣四集』卷二、「福堂詩識」所収。明治二年(一八六九)四月九日、磐溪六十九歳の作。

○己巳 つちのとみ。明治二年。○忽然下獄定何辜 突然投獄されたが、結局、何の罪か。「定」は副詞で畢竟、つまりは、結局。「辜」はつみ。「無辜」という言葉がある。○乾坤一蠹魚 「乾坤」は天地。「蠹魚」はしみ。書物を食う虫。自分は天地の間の一匹の蠹魚にすぎない。磐溪五十六歳の時の詩「読書」にも「俯仰 文字に老ゆ／天地の一蠹魚」とあった。○寧惜死 どうして死を惜しもうか。もう十分、年を取ったから、いつ死んでもいい。○関心唯有嚼餘書 「嚼み餘せる書」とは蠹魚がまだ嚼み残している書物。つまりまだ読んでいない書物があるのが、自分には「関心」心に引かかっている。それだけが残念。

次に「半夜夢醒む」と題する詩。作られた時期は明確でないが、下獄後、六月には「勤仕中不届の儀」ありとして永揚屋(既決囚・終身刑の受刑者の入る獄舎)入りとなっており、刑死を免れない状況になっていた。「陰風」の語が詩中にあるから、はや秋冬のころか。先の「獄に下されて作る有り」の詩が下獄当初の昂然たる心を歌っていたのに比して、この詩は陰鬱を極める。

この詩には杜甫や蘇東坡の詩の影響が深く影を落としている。例えば杜甫の「李白を夢む二首 其の一」である。李白は永王の乱で叛逆罪に問われ、尋陽の獄に繋がれたが、そのとき杜甫は李白の夢を見て心配する。「…魂の来るや楓葉青し／魂の帰るや関塞黒し／君は今羅網に在るに／何を以てか羽翼有る／落月屋梁に満つ／猶お疑う 顔色を照らすかと／…」。

また宋の蘇軾が朝政諷刺のことで御史台の獄に下った時に詠んだ詩、「予事を以て御史台の獄に繋がる。…自ら度るに堪うることを能わず、獄中に死して、子由(弟の蘇轍)と一別するを得じと。故に二詩を作りて、…以て子由に遺る二首」の詩も、獄中の磐溪の意識の底にあった。(磐溪には「蘇東坡の獄中の作に和して以て懐いを言う」という詩もある)。蘇軾の詩(其の二)には云う。「柏台の霜氣 夜凄凄／風 琅璫を動かして 月低きに向う／夢は雲山を繞りて 心は鹿に似たり／魂は湯火に驚き 命は鶏の如し／…」。

三句目の「老梟」ふくろうは中国では古来、不吉の鳥、死の象徴である。文字も「悪」「陰」「冥」「歇」「缺」などすべてマイナスイメージの言葉が連なる。しかも「悪」「歇」「缺」は促音。

半夜夢醒

半夜夢醒む

悪夢惱人眠乍醒

悪夢人を悩まして眠り乍ち醒む

陰風吹髮夜冥冥

陰風髪を吹いて夜冥冥

老梟林外一聲歇

老梟林外一聲歇み

缺月射窓松影青

缺月窓を射て松影青し

△『寧静閣四集』卷二、「福堂詩識」所収。明治二年(一八六九)磐溪六十九歳の作。

○半夜 真夜中。○眠乍醒 「乍」はたちまち。不意に。眠りから不意に目覚めた。○陰風 陰気な風。また冬の冷たい風。○夜冥冥 「冥冥」は暗いさま。○老梟 老いたふくろう。鵬鳥。中国では古来、不吉の鳥とされ、鵬鳥が部屋に入るとその人は死ぬと言われた(漢・賈誼「服鳥の賦」)。○林外 林のそと。林の向こう。○一聲歇 「歇」はなくなつてやむ。一声鳴いたかと思うと、後はしんと静まり返る。○缺月射

窓 欠けた月が窓に射し込む。 ○松影青 松の影が青黒く映る。杜甫の「李白を夢む二首其の一」に「魂の来るや楓葉青し」。

次は「獄夜二首 其の二」。戦犯者として獄に繋がれていた玉蟲左太夫、若生文十郎、栗村五郎七郎らが次々と斬首の刑に遭った。そして今朝がた、隣の牢獄に入っていた誰かがまた斬首の刑に遭い、バサッと首を斬られる音が牢内に響いた、という慄然たる詩である。大槻文彦「磐溪事略」に、出獄後の磐溪から直接聞いたであろうことが次のように記されている。「獄にある者が処刑される時は、獄吏が来て獄屋の入り口を開けて、「何の誰殿、お出っきりでござい」と云う。是れは死刑という意味なのだ。本人は嘆息の声を発する。同室の者は悼む。飯の餘りで獄屋で造った酒を酌みかわしなどして本人は出て行って、斬られる音が獄内へ聞こえる。磐溪先生も其音を聞かれたそうだ。」

獄夜二首 其の二

老樹陰深暁色暝

人聲徹耳夢驚醒

起来毛髮森然豎

比局今朝斬首刑

獄夜二首 其の二

老樹陰深暁色暝し

人聲 耳に徹して夢驚き醒む

起き来れば毛髮 森然として豎つ

比局今朝斬首の刑あり

△『寧静閣四集』巻二、「福堂詩識」所収。明治二年（一八六九）磐溪六十九歳の作。

○陰深 くらいさま。幽暗なさま。 ○暁色暝 夜明け前の空はまだ暗がりの中にある。 ○人聲徹耳 獄吏が囚人を呼び出す声は耳にはっきりと聞こえた。 ○夢驚醒 夢からはっと目覚める。 ○毛髮森然豎 「森然」は多く並び立つさま。またぞつとするさま。「豎」は立つ。 ○比局 隣の部屋（牢獄）。

その後、明治三年（一八七〇）元旦、病氣危篤という名目で出獄を許されることになる。磐溪門人で一閑出身の牢医鈴木玄龍が取り計らった臨機の

処置という。それまでの間、息子文彦の懸命の助命嘆願活動があった。当日の朝、未だ出獄の許可が下りる前に作った詩「庚午獄中元日」は後に触れるが、その詩の後書に「是の日報有り、病を以て帰養を允さる。感泣して輿に就き獄門を出ずれば、則ち城鼓辰刻（午前八時ごろ）を報ずと云う。」とある。

四 狼の詩

出獄後しばらくは仙台に蟄居。明治四年（一八七一）四月二四日になって完全に赦免となり、四月二九日に仙台を離れ上京する。

この仙台蟄居中に作られたと思われる面白い詩がある。その四年前の慶応三年（一八六七）に岩手県江差郡で起った事件、ある農夫が狼に襲われたのを、その妻が狼に立ち向かって夫を助け、狼を生け捕りにしたという事件である。仙台蟄居中にそのいきさつを伝聞した磐溪は「狼を縛る行」一首を作つてこの烈婦を顕彰した。詩はまるで現場に居合わせたかのように、生き生きと描かれており、ルポルタージュ文学の傑作、杜甫の三吏三別の向こうを張るとき秀作である。

しかも、結尾の四句、「匹婦も害を除く此の如き有り／城中の法吏能く恥ずること無からんや／君見ずや 漢安の御史 其の姓は張／狐狸を問わずして豺狼を問うを」には明らかに含むところがある。「豺狼道に当る（＝姦臣が政權を握っている）、安んぞ狐狸を問わん」と言つて巨悪に立ち向かった後漢の御史 張綱の例を挙げ、本当に凶悪なるものをのさばらせておいて、小者をとらえて満足している小吏に対して、磐溪は云う、この狼に立ち向かった勇敢な妻を見習うがいい。「城中の法吏能く恥ずること無からんや」と。自分を捕らえ苛んだ役人どもに対する面当てのごとくである。

縛狼行【原注】江刺郡歌書村農榮之助妻、事在慶應三年四月五日

狼を縛る行

江刺郡歌書村の農榮之助が妻。

事は慶應三年四月五日に在り。

歌書村裏農夫栄

歌書村裏の農夫栄

其妻縛狼事可驚

其の妻狼を縛す事驚く可し

乘薄晚巡馬房
 有狼衝突榮輒僵
 狼跨其上噬左手
 榮極腕力壓狼首
 妻飛炬火來燭之
 夫被狼伏身殆危
 急取勁繩扶兩鬮
 麻索縱橫縛其脚
 繫之大槓防奔逸
 榮也裹創纒入室
 人性誰無惻隱心
 妻之救夫情何深
 而況倉卒収暴怒
 不出打殺出生捕
 漢律捕豺購錢百
 今日賜金誰曰薄
 匹婦除害有如此
 城中法吏能無耻
 君不見漢安御史其姓張
 不問狐狸問豺狼

薄晚に乗じて馬房を巡る
 狼有り衝突し榮輒ち僵る
 狼其の上に跨り左手を噬む
 榮腕力を極めて狼の首を壓す
 妻炬火を飛ばし来りて之を燭せば
 夫狼に伏せられ身殆危し
 急ぎ勁繩を取り兩鬮を扶る
 麻索もて縱横に其の脚を縛り
 之を大槓に繫ぎて奔逸を防ぐ
 榮や創を裹みて纒かに室に入る
 人性誰か惻隱の心無からん
 妻の夫を救う情何ぞ深き
 而るを況んや倉卒に暴怒を収め
 打殺するに出ずして生捕りに出るをや
 漢律 豺を捕うれば錢百に購う
 今日の賜金誰か薄しと曰わん
 匹婦も害を除く此の如き有り
 城中の法吏能く恥ざること無からんや
 君見ずや漢安の御史其の姓は張
 狐狸を問わずして豺狼を問うを

【原注】埤雅云、漢律、捕虎一購錢三千、捕豺一購錢百。漢安、後漢順帝年号。
 張、張綱也。

埤雅に云う、漢律に、虎を捕うること一なれば錢三千に購う、豺を捕うること一なれば錢百に購う。漢安は後漢・順帝の年号なり。張は張綱なり。

△『寧靜閣四集』卷二、磐溪詩鈔四編所収。明治四年（一八七一）磐溪七十一歳の作。

○江刺郡歌書村 現在の岩手県奥州市江刺区広瀬。○慶應三年四月五

日 一八六七年。○乘薄晚巡馬房 夕暮れ時に馬小屋を見に行つた。「薄晚」は晩にせまるの意。○有狼衝突榮輒僵 狼が突進してきて榮之助は押し倒された。○妻飛炬火來燭之 妻が急いで松明を点してこれを照らすと。○殆危 殆も危もあやうい。○急取勁繩扶兩鬮 急いで丈夫な繩を取つて狼の齒茎をこじ開けた。○大槓 大きな杭。○裹創纒入室 傷口を包んでやつとのことで家の中に逃げた。○惻隱心 深く痛ましく思う心。孟子・公孫丑上に「今、人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心有り。」○倉卒 にわかなさま。あわただしいさま。○漢律捕豺購錢百 磐溪の自注に云う、「埤雅に云う、漢律に、虎を捕うること一なれば錢三千に購う。豺を捕うること一なれば錢百に購う。」○今日賜金誰曰薄 江戸時代から明治期にかけて、狼の捕獲に対して各藩・県から御褒美錢・報勞金が出されていた様子は、遠藤公男『二ホノオオカミの最後』（二〇一八年、山と溪谷社）に詳しい。同書に拠れば、時代は下るが、明治八年の岩手県の狼捕獲の報勞金は雌狼一頭八円、雄狼一頭七円、子狼一頭二円。当時、戸長（後の村長）の月給が米二石（六円程度）だったというから、一頭七〜八円というのはかなりの高額である。○漢安 後漢の順帝の年号。一四二〜一四四。○御史其姓張／不問狐狸問豺狼 後漢の御史張綱は漢安の初め、風俗を徇行せよと命ぜられたとき、餘人がみな視察に出かけたのに、独りその車輪を洛陽都亭に埋め、「豺狼道に当る（＝姦臣が政權を握っている）、安んぞ狐狸を問わん」といつて、大將軍梁冀・河南尹不疑等の姦惡十五事を劾奏した。話は後漢書・張綱伝、蒙求・卷中（張綱埋輪）に見える。

五 旅の詩

江戸の漢詩人たちにとって旅をするということは漢詩を詠むという行為を必ず伴うのであった。旅に出れば漢詩を詠む。その結果、紀行文を書くように行く先々で多くの漢詩が詠まれた。

ここではそのうち、磐溪の詩のなかでも特に有名な「平泉懷古」（天保一二年（一八四一）、四十一歳の作）と、晩年七十歳のとき、松島及び作並温

泉を訪れた折の作品を読んでみることにする。

はじめに平泉の中尊寺金色堂を訪ねた折の懷古詩「平泉懷古」其の二。前半二句で藤原氏三代の栄華を「帝京（京都）」にも擬すとか「朱楼」「碧殿」といった色彩豊かな表現で偲ぶ。後半二句では一転して視点が現代に戻り、夜の暗闇を背景に「東山の月」と「金色堂」を浮かび上がらせるといふ趣向である。懷古詩の常として、華やかな過去とさびれた現在を対比させる形になってはいるが、昔に変わらぬ金色に輝く金色堂を、夜の暗闇の中にくっきりと描いて見せたこの趣向は、常道から一歩進んで、まことに映像的で美しい。まるで蒔絵のようである。

三句目の「只今唯だ有り」云々の句は、いうまでもなく李白の懷古詩「蘇台覽古」に「只今 惟だ西江の月のみ有りて／曾て照らす吳王宮裏の人」、また「越中覽古」に「只今惟だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ」とあるのに倣った表現である。

平泉懷古二首其の一 平泉懷古二首其の二
三世豪華擬帝京 三世の豪華 帝京に擬す
朱楼碧殿接雲長 朱楼 碧殿雲に接して長し
只今唯だ東山月 只今 唯だ 東山の月のみ有りて
来照当年金色堂 来り照らす 当年の金色堂

△『寧靜閣一集』磐溪詩鈔卷三、天保一二年（一八四一）磐溪四十一歳の作。
○三世 奥州藤原氏の清衡・基衡・秀衡の三代。○豪華 非常にぜいたくで派手な様子。杜甫「曲江三章章五句」其の二に「比屋の豪華 固より数え難し」。○帝京 天子の都。京都を指す。○朱楼碧殿 「朱楼」は朱塗りの高樓。「碧殿」は碧色に輝く宮殿。白居易「驪山高」に「高高たる驪山上に宮有り／朱楼紫殿三四重」。○只今唯だ 今はただ…があるばかり。李白の懷古詩「蘇台覽古」に「只今 惟だ西江の月のみ有りて／曾て照らす吳王宮裏の人」、また「越中覽古」に「只今惟だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ」とあるのに倣った表現。○当年 往年、そのむかし。○金色堂 岩手県平泉の中尊寺にある藤原清衡・基衡・秀衡三代の廟堂。天治元年

（一一二四）清衡が建立。中尊寺創建当時のままの遺構で、内外を黒漆で塗り、金箔を押ししたのでこの名がある。

次は「鹽松紀游三十首」、塩竈・松島に遊んだときの詩の其の九。七十歳の作。出獄後の疲弊した身体を養っていた時期のものである。

松島を船で遊覧すれば、日暮れ、にわかには夕立が立ち、せつかく昇った月をまっ黒な雲が包んで連れ去ってしまった。しかし見れば雲のわずかな隙間から月影が差し、その光が海上に落ちて、波がキラキラと金色に輝いている。これも前の詩と同じく、黒い空と海をバックに、雲間からわずかに漏れる月の光と水面の金のさざ波を描いて、たいへん印象的。磐溪はこういう組み合わせが好きだったようである。

この詩は蘇東坡の「六月二十七日望湖樓醉書五絶其の一」に「黒雲墨を翻して未だ山を遮らず／白雨 珠を跳らせて乱れて船に入る／地を巻き風来りて忽ち吹き散じ／望湖樓下 水天の如し」とあり、また「望湖樓晚景五絶其の二」に「横風 雨を吹いて樓に入りて斜めに／壯觀 応に須らく好句もて誇るべし／雨過ぎ潮平らかにして 江海碧なり／電光時に掣す 紫金の蛇」とあるのに倣ったものであることは明らかである。暗い背景をバックに金色を輝かせるという描き方も、この蘇東坡の「電光時に掣す 紫金の蛇」という表現に触発されたのかもしれない。

鹽松紀游三十首其九 鹽松紀游三十首其の九
晚來白雨入船多 晚來 白雨 船に入りて多し
奇景使人呼奈何 奇景 人をして 奈何と呼はしむ
潑墨滃雲包月去 潑墨 滃雲 月を包んで去り
餘光落海碎金波 餘光 海に落ちて 金波を碎く

△『寧靜閣四集』卷二、松島奇賞 所収。明治三年（一八七〇）中秋、磐溪七十歳の作。

○鹽松 鹽竈・松島。○白雨 にわかあめ。夕立。李白「蝦湖に宿る」に「白雨寒山に映じ／森森として銀竹に似たり」。蘇軾「六月二十七日望湖樓醉

書五絶 其の一に「黒雲墨を翻して未だ山を遮らず／白雨珠を跳らせて乱れて船に入る」。○入船多 雨がザーッと船の中に降り込む。蘇軾同上詩に「白雨珠を跳らせて乱れて船に入る」。○奇景 めずらしい景観。○使人呼奈何 見る者に「なんとまあ」と叫ばせる。○潑墨 墨をばらまいたように空が一面暗くなる。蘇軾同上詩に「黒雲墨を翻して未だ山を遮らず」。陸游「雪中」に「暮雲潑墨のごとく／春雪花を成さず」。○滃雲 勢いよく沸き起る雲。漢・賈誼「早雲の賦」に「遙かに白雲の蓬勃たるを望めば／滃滃澹澹として安りに止む」。

次は「十月柵南の温湯に洗浴す」。明治三年（一八七〇）十月、磐溪七十歳の作。「柵南」とは作並温泉のことである。おそらく出獄後の衰えた身体を癒やそうと、晩秋の一日、仙台の奥座敷といわれる作並温泉に湯治に出かけたのであろう。夜更けてしーんと静まり返った宿の部屋に、溪流の音だけが耳に立つ。見上げれば黒々とした山々の上、まるい月が小さく光っている。上の二首と同じく漆黒の夜空に浮かぶ小さな月の金色の描写。しかしこの詩の眼目はむしろ静かな夜更けの宿に横たわる老人の耳に響くザーザーという溪流の音。

十月洗浴柵南温湯四首其二三

十月柵南の温湯に洗浴す四首其の三
蒸煙浮処是温源 蒸煙浮かぶ処是れ温源
幾客来投巖畔村 幾客か来り投ずる巖畔の村
夜久楼楼人語寂 夜久しうして楼楼人語寂たり
山高月小水声喧 山高く月小にして水声喧し

△『寧静閣四集』卷二、磐溪詩鈔四編所収。明治三年（一八七〇）十月、磐溪七十歳の作。

○洗浴 出かけて行って温泉に入る。○柵南温湯 作並温泉。○巖畔村 溪谷の険しい崖のほとりの村。○水声喧 溪谷の水音が高く響く。

六 花の詩

花の詩を二首挙げておく。まず「梅を看て夜帰る」。明確な作詩年次は不明だが、五十三歳以前の作。ひねもす梅の樹の下で酒盛りをして、いつの間にか月がのぼり夜が更けた。着物には梅の香が染みついで、帰ったら妻に、こんな時間まで何をしていらしたのですかと妬まれそうだと、と巫山戯ているのは、何やらほほえましい。

看梅夜帰

梅を看て夜帰る

尽日梅辺倒酒瓢 尽日梅辺酒瓢倒る
賞心不觉月臨宵 賞心覚えず月宵に臨む
婦来恐被山妻妒 婦来恐らくは山妻に妬ま被ん
衣上靈香拂不消 衣上の靈香拂えども消えず

△『寧静閣二集』卷二、磐溪詩鈔二編、一百詩鈔所収。卷頭の自注に「此卷不復記支干」。卷末に嘉永癸丑（六年）（一八五三）夏六月の自識あり。よって嘉永六年（一八五三）、磐溪五十三歳以前の作。

○梅辺 梅の樹のほとり。楊万里「周仲覚に和す」に「春は梅辺に在りて動き／寒は月外従り来る」。○酒瓢倒 「酒瓢」は酒を容れるふくべ。ひろく酒器をさす。唐・姚合「田卿が書斎即事を寄せらるるに酬ゆ」に「是れ相尋ぬること嬾きにあらず／君を煩わして酒瓢を挙げん」。「酒瓢倒る」とは酒瓢が空になって倒れるほどたくさん酒を飲むこと。○賞心 景色をめでて楽しむ心。謝靈運「魏太子鄴中集詩序に擬す」に「天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者は并せ難し」。○月臨宵 名月が宵の空にかかると時刻になってしまった。○山妻 元来は隱者の妻を指す言葉だが、のち自分の妻を謙遜して言う。杜甫「孟倉曹趾を歩ませ新たなる酒醬二物の器に満たせるを領えて老夫に遺らるる」に「生を理むるに那ぞ俗を免れん／方法 山妻に報ぜよ」。○靈香 神奇靈妙な香り。顧況「八月五日の歌」に「清葉靈香幾処に聞く／鸞歌鳳吹祥雲を動かす」。

続いて「海棠の雨」。明治九年（一八七六）磐溪七十六歳の作。杜甫には海棠の詩が無いということが多く言われているが（下の注を参照）、杜甫の「春夜雨を喜ぶ」の詩に「曉に紅の湿れる処を看れば／花は錦官城に重からん」とあるのはまさに海棠の花を指しているのではないかと、と磐溪は指摘する。杜甫の詩が本当に海棠を歌っているかどうかは不明だが、磐溪はそのように信じてこの作品を作っている。起承の二句「枝枝 雨を帯びて太だ多情／嬌態含羞 涙に声有り」は雨に濡れる海棠の花を描いて、まことに艶。枝から長い柄をのばした先に、うなだれたような紅の花を咲かせるさまは、まさに「嬌態含羞」、雨に濡れるさまはまさに「涙に声有り」である。

海棠雨

枝枝帯雨太多情
 嬌態含羞涙有声
 誰道少陵無一句
 曉紅花重錦官城

海棠の雨
 枝枝 雨を帯びて太だ多情
 嬌態含羞 涙に声有り
 誰か道う 少陵に一句も無しと
 曉に紅の花は重し 錦官城

△『寧静閣四集』巻三、磐溪詩鈔五編所収。明治九年（一八七六）磐溪七十六歳の作。

○枝枝帯雨太多情 海棠の枝枝が雨を含んではなはだ風情がある。「多情」はいかにも感情に富んでいるように見えるということ。○嬌態含羞涙有声 「嬌態」はなまめかしい姿。「含羞」ははじらう、はにかむ。「涙有声」は涙をこぼして泣いているようだ。○誰道少陵無一句 「少陵」は盛唐の詩人杜甫（七一二～七七〇）、字は子美。少陵と号した。杜甫に海棠を詠んだ詩が無いという指摘は、唐末の鄭谷の「蜀中海棠を賞す」の詩に「浣花溪上 惆悵するに堪う／子美 為に発揚するに心無し」とあり、その自注に「杜工部 西蜀に居りしに、詩集中に海棠の題無し」とあるのをはじめ、唐末に既に若干見えるが、宋代になってからは多くの人がこのことに言及している。例えば梅堯臣は「海棠」の詩で「当時杜子美／吟徧さも独り（海棠を）相忘る」と言い、王安石も「微之と共に梅花を賦して香字を得たり」其の二に「少陵爾（梅）に詩興を牽かるるも／可是（かえ）って海棠を賦

するに心無し」と言い、楊万里も「海棠四首」其の四に「豈に是れ少陵に句子無からんや／少陵未だ見ざる 如何せんと欲す」とある。詳しくは岩城秀夫『中国人の美意識』（一九九二年、創文社）所収の「杜甫に海棠の詩のないのは何故か」を参照。○曉紅花重錦官城 杜甫の「春夜雨を喜ぶ」の詩の尾聯に「曉に紅の湿れる処を看れば／花は錦官城に重からん」とある。この「花」を牡丹の花と解する者が多いが、磐溪は海棠の花を詠んだ句と見ている。宋代になると「洛陽の人は牡丹を謂いて花と為し、成都の人は海棠を謂いて花と為す」（『鶴林玉露』巻一）という区別が明確化するが、杜甫の時代には未だ必ずしもそういう区別はないので、この「花」が何かは不明。

【参考】春夜喜雨

好雨知時節
 当春乃發生
 隨風潛入夜
 潤物細無聲
 野徑雲俱黑
 江船火獨明
 曉看紅濕處
 花重錦官城

春夜 雨を喜ぶ
 好雨時節を知り
 春に当りて乃ち發生す
 風に隨いて潜かに夜に入り
 物を潤して細やかにして声無し
 野徑 雲は俱に黒く
 江船 火は独り明らかなり
 曉に紅の湿れる処を看れば
 花は錦官城に重からん

七 晩年の詩

磐溪は古稀を獄中で迎えた。明治三年（一八七〇）元旦の詩「庚午獄中元日」が残っている。元旦に「囚人迎え得たり古稀の壽」。もし囚人でなければこの日をどう過ごしていたらどうか、「是れ囚人ならずば奈何せんと欲する」。妻や子らに囲まれた古稀の賀など、獄中ひとり想像していたのかもしれない。

庚午獄中元日
 臘月残年雪裡過
 今朝初覚日光多

庚午獄中元日
 臘月残年雪裡に過ぐ
 今朝初めて覚ゆ日光多きを

囚人迎得古稀壽
不是囚人欲奈何

囚人迎え得たり古稀の壽
是れ囚人ならずば奈何せんいかんと欲する

△『寧静閣四集』卷二、「福堂詩識」所収。明治三年（一八七〇）磐溪七十歳の作。

○庚午 かのえうま。明治三年。○臘月 十二月。○残年 生きながらえている残りの命。余生。韓愈「左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す」に「敢て衰朽を將て残年を惜しまんや」。○雪裡 雪の中。

しかし同日朝、にわか「病氣危篤」という名目で出獄の許可が下りたことは前述のとおりである。その後、一年数か月は仙台で蟄居することになるが、それまでただ「勤仕中不屈の儀」とありと断ぜられるばかりであったものが、明治四年（一八七二）四月になって、維新政府から初めて正式に「訊問状」が下され、朝廷への建白書、奥羽列藩同盟約書、輪王寺宮令旨の起草など、戊辰戦争時の嫌疑につき六か条の訊問があった。その認否が済んでようやく救免となり、四月二十九日、東京へ向かう。

五月八日、東京着。そのときの感慨を歌ったのが「入都」の詩である。戊辰の戦犯として死を迎える覚悟であったが、白髪頭の爺がまた家族とともに東京暮らしをすることになったと、自嘲ぎみに歌っている。

入都【原注】辛未五月八日

都に入る【原注】辛未五月八日

故山埋骨計還空 故山に骨を埋めんとするも計還つて空しく

世態変遷難可窮 世態の変遷 窮む可きこと難し

自笑白頭翁七十 自ら笑う 白頭の翁七十

携家又入軟紅中 家を携えて又た入る 軟紅の中

△『寧静閣四集』卷三、磐溪詩鈔五編所収。明治四年（一八七二）磐溪七十一歳の作。

○故山 故郷。○世態 世の中のありさま。○携家 家族を伴って。

○軟紅 軟紅塵。繁華な都会。東京を指す。

その後、磐溪は晩年の静かな日々を過ごすことになる。明治九年（一八七六）正月、例によって新春の詩を詠む。よくも生きてきたものだ。もう七十六歳になる。八歳で井上四明先生とその孫井上毅斎先生の門をくぐり、素読の勉強を始めて以来、何十年になるか。まるで隔世の感がある。

丙子一月一日随例賦二絶句 其二

丙子一月一日、例に随いて二絶句を賦す 其二

喜迎七十六年春 喜び迎う七十六年の春

游戲人間未死身 人間に游戲して未だ死せざる身

却算垂髫就師日 却つて垂髫 師に就く日を算うれば

恍然自覺隔生人 恍然として自ら覺ゆ 隔生の人なるを

△『寧静閣四集』卷三、磐溪詩鈔五編所収。明治九年（一八七六）磐溪七十六歳の作。

○丙子 ひのえね。明治九年（一八七六）。○人間 この世。「じんかん」とよむ。○垂髫 垂れ髪、童児。○就師日 磐溪は八歳のとき井上四明およびその孫井上毅斎に大学・論語・孟子等の素読を受けた。○恍然 ぼうつととするようす。○隔生 隔世に同じ。時代がかけ離れている。

同年八月、本郷金助町（現文京区本郷三丁目）の新居に移る。三階建ての家で、窓から富士山が見えた。ここが磐溪の終の棲家となる。その新居での詩のひとつ。

丙子八月十三日移居于本郷金介巷賦六絶句以告来訪諸君 其三

丙子八月十三日、居を本郷金介巷に移す。六絶句を賦し、以て来訪の諸君に告ぐ 其三

也無酷吏苦斯身 也た酷吏の斯の身を苦しむる無く

四壁清風拂熱塵 四壁の清風熱塵を拂う

回想艱難戊辰事 回想す 艱難 戊辰ぼしんの事
恍然恰似再生人 恍然として恰かも似たり 再生の人に

△『寧静閣四集』巻三、磐溪詩鈔五編所収。明治九年（一八七六）磐溪七十六歳の作。

○本郷金介巷 本郷金助町（きんすけちやう。現文京区本郷三丁目）。三階建ての新居で富士山が見えるので「岳雪楼」と名づけた。磐溪終焉の地。○也無酷吏苦斯身 もはや無慈悲な役人にこの身を苦しめられることもない。○四壁 家の四囲の壁。阮籍「詠懷詩」に「廻風 四壁を吹き／寒鳥 相因依す」。○熱塵 暑苦しき。○艱難 苦しき。○戊辰事 戊辰戦争にまつわるさまざまなこと。

「艱難 戊辰の事」を回想すれば、獄中「酷吏の斯の身を苦しむることなど今さら思い出されるが、辛い死にもせず、こうして新居にくつろいでいる。一度死んだ人間が、また生まれ変わって生きているような気分だ。先の詩もこの詩も「恍然として」という言葉を使って、人生をふり返っている。磐溪はこの住まいで明治十一年（一八七八）六月十三日、七十八年の生涯を終えた。

八 三男文彦への激励

東京で晩年の八年間を静かに暮らした磐溪にとつて、おそらく最も嬉しかったことは、三男文彦が明治六年（一八七三）十一月八日、新設の宮城師範学校の校長に任命されたことであろう。磐溪七十三歳、文彦二十七歳のときのことである。

新政府は明治五年（一八七二）「学制」を發布し、全国に五万三千餘の小学校を開設することになった。その教師を養成するために設置されたのが官立師範学校である。文彦は明治六年（一八七三）七月に宮城師範学校設立御用係、十一月に校長に任ぜられる。

さっそく磐溪は激励の詩「児文彦 師範学長の命を拝し、將に任に宮城県

に赴かんとす。此を言いて之を勉す」を作る。蘇東坡の父、蘇洵がそれまでの生活を捨て、発奮して学問に取り組み、諸葛孔明が三顧の招きを受けてついに出慮したとき、そんな大げさな例を挙げて、お前の活躍はまさにこれからだぞ、と励ましている。磐溪自身の喜びがほとぼり出るような気負った詩である。思えば獄中の磐溪の助命歎願に奔走した文彦は、命の恩人である。その息子がようやく立派な地位に就いたのだから、うれしくないはずがない。

児文彦拝師範学長の命、將赴任於宮城県、言此勉之

児文彦 師範学長の命を拝し、將に任に宮城県に赴かんとす。此を言いて之を勉す

老蘇發憤日 老蘇 發憤するの日

諸葛出慮時 諸葛 出慮の時

汝今拝朝命 汝今 朝命を拝し

居然為人師 居然として人の師と為る

設為五萬三千鬢 五萬三千鬢を設け為して

欲化尋常億兆民 尋常億兆の民を化せんと欲す

勝任与否且休説 任に勝うると否とは且く説くを休めよ

播揚皇風在此辰 皇風を播揚するは此の辰に在り

△『寧静閣四集』巻三、愛古堂漫稿所収。明治六年（一八七三）磐溪七十三歳の作。

○老蘇發憤日 「老蘇」は蘇洵（一〇〇九〜一〇六六）。歐陽脩の蘇君墓誌銘によれば、若いころは学問嫌いだったが、「年二十七にして始めて大いに發憤し、其の素より往来する所の少年を謝して、戸を閉じて書を読み、文辞を為る。歳餘にして進士に挙げらる」云々とある。（「年二十七」というのはあたかも文彦と同じ年である）。「發憤」は心を奮い立たせる。○諸葛出慮時 「諸葛」は諸葛亮、字は孔明（一八一〜二三三四）。孔明は蜀漢の劉備の三顧の招きを受け、草廬を出て出仕することにした。○汝今拝朝命 一関市博物館企画展図録『大槻磐溪―東北を動かした右文左武の人―』（二〇〇四年、一関市博物館）に載せる磐溪自筆の書に拠れば、ここ

は「一旦拜朝命」に作る。○居然 意外にも、あろうことか。またどつしりして動かないさま。ここは前者の意。○設為五萬三千蠻 小学校を全国五万三千七百六十校開設（八大学区×三二中学区×二一〇小学区×五三七六〇小学校）。孟子・滕文公上に「庠序学校を設け為して以て之を教う。」「養」は校に同じ。○尋常億兆民 多くの一般庶民。○播揚皇風 播揚は宣揚に同じ。広く天下に明らかにする。皇風は天子の徳。

いま宮城教育大学附属図書館には、このとき磐溪が息子のために揮毫した「師範学校」の扁額（一八二・〇×六六・〇cm）が保存されている。揮毫した書の原本を仙台に送った時の手紙には次のように記されている。「師範学校の額字でき、郵便に差し出し候。校の字、少し氣に入らず、但し三度目の正直と此のまま相廻し候。なにとぞ、開校のまに合はせたまきものに候。」「小学校開校（小学師範学校の意）四十八人入学、且つ類令利（伶俐）の由、同慶の事に候。これからは、仙台者に致さざるよう精々勉勵これあるべく候。」「大村榮『養賢堂からの出発 教育百年史余話Ⅰ』（一九八六年、ぎょうせい）に拠る。）。

扁額のための揮毫を何度も書き直したとか、やがて教師となる生徒を「仙台者に致さざるよう精々勉勵これあるべく候」と注意したりと、嬉しさと文彦への期待にあふれた手紙である。

奉命遣師範学校於仙台

命を奉じて師範学校に仙台に遣わさる

大槻文彦

文明到処有輝光	文明の到る処輝光有り
聖主威風被八方	聖主の威風八方を被う
五万三千開小学	五万三千小学を開き
東西南北設周庠	東西南北周庠を設く
人唯拔俊農商士	人は唯だ俊を農商士より抜き

学独求精皇漢洋 学は独り精を皇漢洋に求む
幸是微臣遭盛際 幸いに是れ微臣盛際に遭う
奥東教化破天荒 奥東の教化 天荒を破らん

△明治六年（一八七三）文彦二十七歳の作。文彦が宮城師範学校校長として赴任するに際して、父磐溪の祝詩に答えた詩。宮城教育大学附属図書館所蔵の掛軸「大槻文彦先生之詩 春陵書」（宮城県図書館から宮城師範学校に寄贈されたもの）に拠る。春陵とは印記に拠れば神孫子（あびこ）源、号は春陵。詳細は不明。この写しの元となった文彦自筆の書がどこかにあるはずだが、宮城県図書館の目録には見えない。

○設周庠 「周庠」は学校の意。孟子・滕文公上に「庠序学校を設け為して以て之を教う。…夏には校と曰い、殷には序と曰い、周には庠と曰い、学は則ち三代之を共にす。」○人唯拔俊農商士 「農商士」は士農工商。七律の頸聯で六句目の「皇漢洋」と対するために「工」を抜かしただけ。士農工商の区別なく、優秀な教師を抜擢する。○学独求精皇漢洋 学問はその精華を日本・中国・西洋から取り入れる。○微臣 身分卑しい臣下。文彦の謙称。○盛際 盛んなる御代。○奥東教化破天荒 「奥東」は極東。欧米から見て東の果て。「破天荒」は天地未分の渾沌たる状態を破り開く。今までなされていなかったことを初めて行うこと。



大槻磐溪書 宮城師範学校扁額（宮城教育大学附属図書館 所蔵）

【参考文献】

- 富士川英郎他『詩集日本漢詩第十七巻（大槻磐溪寧静閣集他）』（一九八九年、汲古書院）
 - 一関市博物館企画展図録『大槻磐溪―東北を動かした右文左武の人―』（二〇〇四年、一関市博物館）
 - 大島英介『大槻磐溪の世界 昨夢詩情のこころ』（二〇〇四年、宝文堂）
 - 大島英介『遂げずばやまじ 日本の近代化に尽くした大槻三賢人』（二〇〇八年、岩手日報社）
 - 石川忠久「大槻磐溪の詩」（平成二六年度全日本漢詩大会宮城大会の記念講演録。『宮城県漢詩連盟会報 養賢』第八号（二〇一五年）所収）
 - 富士川英郎「江戸後期の詩人たち」（一九七三年、筑摩書房。二〇一二年、平凡社東洋文庫）
 - 鶴飼幸子「大槻磐溪と開国論」（『仙台市博物館年報』第六号、一九七九年、仙台市博物館）
 - 庄司荘一「大槻磐溪伝」（『高野山大学論叢』第二二巻、一九八七年、高野山大学）
 - 庄司荘一「大槻磐溪のこと―その略伝と業績について―」（『甲南国文』第三四号、一九八七年、甲南女子大学国文学会）
 - 工藤宜「江戸文人のスクラップブック」（一九八九年、新潮社）
 - 一関市博物館『塵も積もれば―磐溪先生の貼り交ぜ帳』（二〇〇六年、一関市博物館）
 - 一関市博物館『江戸文人の交友録―大槻磐溪をめぐる人々―』（二〇一六年、一関市博物館）
 - 宮城県図書館『青柳・今泉・大槻・養賢堂文庫和漢書目録』（一九八四年、宮城県図書館）
 - 高田宏『言葉の海へ』（一九七八年、新潮社、のち新潮文庫）
 - 一関市博物館「ことばの海 国語学者大槻文彦の足跡」（二〇一一年、一関市博物館）
 - 岡千仞『在臆話記』第一集巻九「磐翁事略他」（『隨筆百花苑』第一巻所収、一九八〇年、中央公論社）
 - 宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』（一九七五年、岡弘（私家版））
 - 宇野量介『明治初年の宮城教育』（一九七三年、宝文堂）
 - 木村榮『養賢堂からの出発 教育百年史余話Ⅰ』（一九八六年、ぎょうせい）
 - 新潟県立歴史博物館・福島県立博物館・仙台市博物館『戊辰戦争一五〇年』（二〇一八年）
- 〔付記〕本稿は平成三〇年十一月一日、宮城県漢詩連盟の漢詩養賢講座「江戸の漢詩人」第四回において行った講演「大槻磐溪の漢詩」に基いて加筆・修正を施したものである。